

# VARÓN DE DIOS

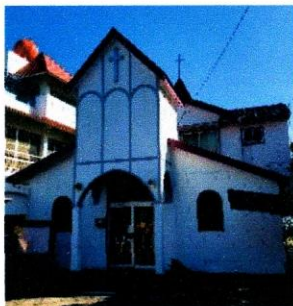
## (神の人)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団  
九州教区 壮年部 2022年6月号

ハレルヤ！主の御名を賛美します。

九州教区内の壮年部の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

6月5日（日）はペンテコステです。クリスマスや復活祭と同じように、この日はAG教団の教会員にとっては特別な日です。教団発行のアッセンブリーNews6月号の2,3面には「聖霊を受けよ！」と題して、信仰の先輩方の力強い聖霊体験が掲載されています。一番必要なのは「聖霊様に満たされること」であると改めて思いました。



さて今回は、熊本県にある本渡基督教会の2人の方の証です。本渡基督教会は、天草の上島と下島をつなぐ天草瀬戸大橋のふもとにあります。1957年にアーサー・グレイル宣教師と野副牧師によって開拓が始まり、1967年に現在の会堂が建てられました。高齢化が進む天草の中でも子どもや若い人が比較的多い地域にあり、最近では近隣の子どものための伝道にも力を入れています。



## 「神様の愛によって生きる」

原田 栄次



天草・島原の乱で知られる天草で生まれ育ち、生活をしています。教会に初めて行ったのは、18歳の時でした。自動車整備工場

で弟子として住み込みで働いている時に、姉から特別伝道集會にさそわれ、それが神の導きでした。家族からの誘いであったので、行ったのだと思います。

教会で出会いがあり、結婚も神様が導き合わせて下さいました。四人の男の子に恵まれ、二人目の子どもが生まれる時まで教会へ行きました。仕事、子育て、学校行事と忙しい毎日に、段々と神様の恵み・祝福・感謝を忘れて毎日を送る日々になっていきました。今は反省して後悔しています。

私は、今76才になり、大きな試練も通りました。その中で、教会へ導かれた時の証をさせていただきます。

私には四人の男の子どもがおりましたので、子どものスポーツ応援に行くのが、私に働く力とエネルギーを与えてくれました。子どもが中学二年生の時でした。学校が荒れ、先生達も困っておられました。その時に学校役員をしていましたので、自分に力がないのに、先頭になって取り組みました。先生達の指導もあって、学校はだんだんよくなっていきました。

その反動がきたのだと思います。うつ病になり、寝れない日々が続きました。精神科の病院へ行くと、医者から「何か一生懸命にされたのでは」と聞かれました。今考えると、私の力に限界があるのを知り、どうしていいのかわからなくなっていました。寝れない日々が続き、夜が来るのが怖

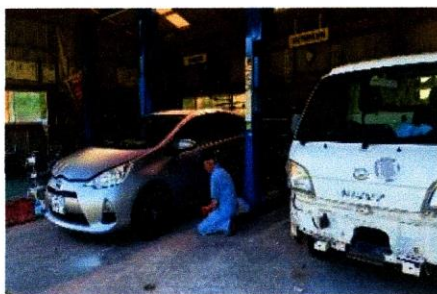
くなっている時に聖書のみことばが与えられました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ6章33節)

自分の中の大切なものを忘れてもがいていました。

「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(Iコリント10章13節)

はっきりと、礼拝の大切さを教えられました。生活のリズムを整えるよう努力する事を決心しました。



現在、自動車整備工場を次男と妻と頑張り、山の中で神様の恵

みと祝福をいただきながら、感謝してやっています。教会で神の家族として多くの方々から祈られている事を日々感じています。76年間の歩みの中で、イエス・キリストの愛による救いがあった事を深く感謝しています。これからの歩みも聖霊様が働いて、導き、助けて下さるといふ信仰を持って祈っていきたいと思います。

## 「私の人生と信仰」

吉田 要



私と神様との出会いは幼少期、両親がクリスチャンだったからです。私自身が洗礼を受けたのは高校卒業直前の19歳の時でしたが、その頃はあまり熱心なクリスチャンではありませんでした。

1990年の4月、私の大学入学を機に地元を離れ、当時私が住んでいたアパートに近い教会を紹介していただき、最初の一年間は通ったのですが、あの頃は若気の至りとも言えるのでしょうか、アルバイトと学業の忙しさに追われていた事や、他にやりたい事を満喫したい自分勝手な思いから、ある日を境に教会に行く事を辞めてしまいました。

それからの私は自室で聖書を読み、祈る事は続けていましたが、そのうち信仰そのものにも次第に嫌気が差してきて、とうとう神様から離れてしまったのです。

その間、私の人生は失敗や苦難との闘いでした。大学卒業後も地元を離れたままその地で就職しますが、何をやってもうまくいかず、挑戦と挫折を繰り返すようになっていき、改めて信仰の大切さを思い知らされました。やはり教会に行きたいという気持ちは心のどこかでくすぶり続けていたのではないかと思います。心の中では今こそ悔い改めてもう一度神様のもとに帰りたいと何度も思いつつ、教会の玄関の近くまでは行けても、そこから先なかなか足を踏み入れる勇気がなく、結局は他の信徒が来られる前に足早に帰ってしまう、その繰り返しでした。

その間、私の人生は失敗や苦難との闘いでした。大学卒業後も地元を離れたままその地で就職しますが、何をやってもうまくいかず、挑戦と挫折を繰り返すようになっていき、改めて信仰の大切さを思い知らされました。やはり教会に行きたいという気持ちは心のどこかでくすぶり続けていたのではないかと思います。心の中では今こそ悔い改めてもう一度神様のもとに帰りたいと何度も思いつつ、教会の玄関の近くまでは行けても、そこから先なかなか足を踏み入れる勇気がなく、結局は他の信徒が来られる前に足早に帰ってしまう、その繰り返しでした。

そんな私に転機が訪れたのは、私が親元を離れてから二十年経った 2011 年の事でした。ある日、当時の本渡教会の牧師だった大村師夫妻が私の母が病に倒れたと電話を下さり、以降 1 年間にわたって地元へ帰るよう説得され、遂に私も地元へ帰ると共に母教会の本渡教会にも再び行くようになりました。

はじめこそはただ礼拝を聞くだけでしたが、やがて真剣に神様の愛、「救い」の大切さを深く理解し、聖書を読み、祈り、以降十年間休む事無く信仰生活に励んでいます。



一時期、本渡教会では牧師不在の状況になり、その間は私がメインとなって教会の多くの奉仕に携わるようになり、こんな私でも神様のために働ける喜びを実感させていただきました。そして、今でも教会役員として、教会運営に関わるものから様々な奉仕に携わる事が出来、この事こそ私の信仰生活の励みにもなっています。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしは知っている。」(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

私の人生は遠回りでありながらも、これもひとえに神様のご計画であったのでしょう。一時期は信仰から離れ様々な苦難や試練を通してあらためて神様と繋がっている事の大切さを思い知らされた空白の二十年間でしたが、そんな時期があったか

らこそ今の自分があるのです。これから先も様々な試練が与えられる事でしょう。だけど、どんな事があってもイエス様はいつも傍にいて下さり、全ての祈りを聞き入れて下さる事を信じ、信仰の心が緩む事無く、これからも主と共に歩んでいきたいと思えます。

## 編集後記

1998 年に AG 教団の壮年部委員会から発行された「壮年」という冊子を、教団から送っていただきました。その中にある杉本俊輔師の文章を紹介します。

マルグリートはスイスの国境近く、山中の一小村に生まれた女です。後にその夫となったガスパールもまた同郷の人で、兩人とも幼い時に両親を失い、孤児となりました。マルグリートが 22 歳の年に婚約し、苦難を共にすることを誓いました。不幸な生い立ちの二人でしたが希望に満ちて結婚までの日を楽しみながら過ごしていました。

ある日のこと、ガスパールは石切り場で重傷を負い、その上盲目となってしまいました。「マルグリート、私はこんな障がい者になってしまった。婚約は取り消そう。他の人を選んで楽しく半生を送りなさい。ちっとも私に遠慮することはないんだよ。」

「なんと言うことをおっしゃるのです。もし私が盲目になりましたら、あなたは私をお捨てになるのですか。私はあなたの心の目となり杖となります。」

「とんでもない。私があなたを捨てるものですか。神様が保証人です。」

「ごらんください。私だって同じことです。」盲目のガスパールは、彼女の純情に感激して改めて結婚式を挙げ、二人は証人なる神に守られて幸福な生活を送りました。